映画）の作製並びに貸付など様々な方策を講じて目的の達成を図ろうとしている。国体の浸透には学校教育の重要性に加えて、文部省や林銑十郎といった軍部の関与が指摘される（島薗進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『戦争の時代――昭和初期―敗戦』春秋社、二〇二一年、二六頁）。中央教化団体連合会は内務・文部官僚や陸軍大尉・林、海軍大尉・野村芳三郎も理事に加わっている。植民地も含む四八団体を傘下におさめて教化を展開した中央教化団体連合会は、国体の発揚に大きな役割を果たした。こうした教化が、国民にいかに浸透したのかを検討する必要があることを確認した。

昭和神聖会と「満洲国」
――アジア主義と超国家主義の交錯点――

玉置　文弥

本報告では、一九三四年七月に大本教が中心となって結成された昭和神聖会を「満洲国」の視点から分析し、その運動の思想的位置づけをアジア主義と超国家主義の交錯点に見出さんとするものである。昭和神聖会は、日本最大の宗教弾圧事件とされる第二次大本事件の直接的契機となった運動として知られる。日本の右翼・国粋主義団体の統合を目指し、大本教・出口王仁三郎を核として、その信者のほか、内田良平ら伝統的ナショナリスト、松岡洋右や一条実孝といった政治家・軍人、満川亀太郎、倉田百三のような求道的超国家主義者らが参加・協力し、最終的には八〇〇万人とも言われる賛同者を得て海軍軍縮条約反対や天皇機関説排撃などの運動を展開した。その後一九三五年一二月八日、皇道を標榜しながらも王仁三郎が皇位簒奪を狙っているという理由から、不敬罪などによって大本教が徹底的に弾圧されると同時に結社禁止となり、終焉を迎えた。

昭和神聖会は、当時から大衆的基盤を持ったファッショ運動として論じられることが多かったが、戦後の研究においても、異端的でラディカルな皇道主義という論点が加わったとはいえ、大きく見ればその評価は変わっていない。すなわち、日本国内の政治史・宗教史・思想史の文脈での研究が長らく行われてきたのである。しかし、第二次大本事件を主導した当時の特高課長唐沢俊樹が戦後、①道院・世界紅卍字会との提携による「満洲」進出と、②国内での右翼・軍人との国家革命を大本教弾圧の原因として挙げているように、昭和神聖会には「満洲国」での大本教の活動がその前史として密接に関わっているため、①と②の関係性、さらに言えば「外地」=「満洲国」の視点からの分析は必須であろう。

「満洲（国）」での大本教は、道院・世界紅卍字会との連合運動（一九二三年～一九三五年）によって伸長した。その間、宗教・慈善活動のほか黒龍会などのアジア主義者、関東軍、張作霖などと関係しての「満蒙独立国」建国運動などを行った。満洲事変後は、大本教の実践団体人類愛善会が紅卍字会の社会的基盤に乗ずる形で、災害救援・貧民救済などを半ば公的機関として行いつつ、「建国」後は「満洲国」全域に支部を設立し、関東軍の宣撫活動にも加わった。ところがこういった活動は、その主導権が王仁三郎ではなく満洲本部の井上留五郎にあったことや、王仁三郎が「五族協和」を無視しているとして関東軍

の統治方法への批判を行ったこと、さらには当地における大本教のプレゼンスが低下していったことなどによってやがて停滞し、その重心は「国内改造」へと移っていった。

その際重視されたのは、「アジア連盟」という思想である。すなわちアジア諸国を日本に「頼らせる」ことでアジアを統一するという主張だが、王仁三郎によれば現状の日本はそれが可能な国家ではない。したがって「神政復古」を目指す昭和神聖会を結成した。ここに現実国家の超越としての超国家主義と、アジア主義の交錯点が看取される。

ところで、これまでの研究では、昭和神聖会支部は国内に留まっていたとされてきたが、本報告では、「満洲国」にも関東州地方本部・大連支部・旅順支部の三件が開設されていたことも明らかにした。それらは第二次大本事件の一ヶ月前に行なわれたため、具体的な活動はほとんどできなかったが、大本教はこういった運動の経緯を、支部の展開や賛同者の増加などを強調するスペクタクルの重視によって、あたかも「満洲国」で絶大な権力基盤を持ち、それをもって国内改造に乗り込むというイメージを、社会・政治的に与えるということに成功した。しかしそれは、弾圧の引き金として「張子の虎」的な役割を果たすことになったのではないか。すべてこれらのことは、第二次大本事件を再考するためにも、極めて重要な視点であると考えられる。

大田南畝の信仰

木村　中一

「恐れ入谷の鬼子母神　びっくり下谷の広徳寺　どうで有馬の水天宮　志やれの内のお祖師様」。江戸時代の言葉遊び「恐れ入谷の鬼子母神」は大田南畝（一七四九―一八二三）の狂歌に由来するともいわれている。日本近世を代表する文人として名高い大田南畝は本年没後二〇〇年をむかえて、現在脚光を浴びている。

文人・狂歌師、また幕府に仕えた御家人として天明期に広く活躍した大田南畝について少しくみると、その名を「覃」、号を「南畝」と称し、その他の号として「杏花園」「巴人亭」「四方赤良」「寝惚先生」「念法華先生」や「蜀山人」などともいった。先にも述べたとおり、本年は没後二〇〇年という記念の年であり、多くの「大田南畝関係」の特別展が開催されている。そして大田南畝の生涯や活動に迫る書物もまた多く出版されているが、それらは大田南畝の狂歌師としての活躍や幕臣としての人物像にスポットをあてたもので、大田南畝その人の信仰に焦点をあてた論考は管見の限り少ない。

本発表はスポットが当りづらい大田南畝の信仰について、その交友関係、特に深見要言という在家日蓮信奉者と関わりと、深見要言の著した「日蓮伝記物」に大田南畝が寄せた「序」などの記述より探るものである。

まず、大田南畝と深見要言の関係についてみてみたい。深見要言の人物像については不明な点が多く、深見要言の生涯やその信仰活動を紐解くには現在、大田南畝が深見要言の著わした